

# 効果的な「海外フィールド演習」の実施に向けた課題

—ベトナム・トゥアティエンフエ省でのパイロットプログラムを通して—

筒井一伸\*・片垣亜弥子\*\*・仲野 誠\*・小玉芳敬\*\*\*・  
ブイ ティ トウ\*\*\*\*・レ ディン トウアン\*\*\*\*・チュオン ディン チョン\*\*\*\*

A report on the solutions for technical problems  
of an "Overseas Fieldwork" Pilot Program in Vietnam

TSUTSUI Kazunobu, KATAGAKI Ayako, NAKANO Makoto, KODAMA Yoshinori,  
Bùi Thị Thu, Lê Đình Thuận, Trương Đình Trọng

キーワード：海外地域調査，地形調査，集落調査，フールオン行政村，レーサーチュン村

Key Words: Fieldwork in foreign countries, Geomorphological Research, Community Research, Phu Luong Commune, Le Xa Trung Village

## I はじめに

2013年度よりいよいよ地域学部専門科目「海外フィールド演習」が本格稼働する。地域学部では、①地域学部学生および教員の国際交流の推進，②地域を見つめる目の複眼化と地球地域学という発想の醸成，③北東アジア研究の推進，を背景に2010年度より「海外フィールド演習」の実施に向けて準備を進めてきた（筒井ほか，2012）。鳥取大学は2012年度より文部科学省「グローバル人材育成推進事業」に採択されており，地域学部の海外留学経験者数の目標値は2012年度12名（内3か月未満の短期留学，以下同様：8名），2013年度14名（10名），2014年度15名（10名），2015年度23名（18名），そして最終年度である2016年度は38名（30名）に設定されている。このうち3ヶ月未満の短期プログラムの中心となるものが「海外フィールド演習」である。

海外フィールド演習は2010年度の韓国・江原大学校における実習（田川・永松，2010）を皮切りに試行錯誤を重ねてきたが，2012年度は表1にあるような5つの海外フィールド演習パイロットプログラムが企画された。今年度は新たにインドネシアプログラムを加えてアジア地域のプログラムの充実を図るとともに，はじめてアジア以外での実施を検討するためアメリカプログラムの試行も行われた。実施地域の状況により1つのプログラムは中止を余儀なくされたが4つのパイロットプログラムが実施され，「海外フィールド演習」を行っていくうえでの課題の洗い出しがなされた。本稿では企画から準備までの過程および地域調査の内容とその課題を検討することを目的に，昨年度に引き続き2012年度実施されたパイロットプログラムのうち，2013年3月3日から3月11日までの9日間で実施したベトナム・フエでのプログラムについて報告を行う。

---

\*鳥取大学地域学部地域政策学科

\*\*鳥取大学工学部附属グリーン・サステイナブル・ケミストリー研究センター

\*\*\*鳥取大学地域学部地域環境学科

\*\*\*\*フエ科学大学地理地質学部

表1 2012年度「海外フィールド演習」パイロットプログラムの一覧

プログラム名	期間	プログラム内容	使用言語	参加学生人数	担当教職員 <sup>注)</sup>
韓国 江原プログラム	2012年9月2日 -9日	観光政策と自然環境の調査・ 江原大学学生との交流	主に英語	6人	永松大 (地域環境学科) 馬場芳 (地域政策学科)
中国 東北農業大学プログラム	2012年9月21日 -27日	自然エネルギーの導入状況調査・ 東北農業大学学生との交流	主に英語	※実施地域の 状況により中止	田川公太郎 (地域環境学科)
アメリカプログラム	2013年2月28日 -3月7日	カリフォルニア大学デービス校との交流・サンフランシスコ市内での多文化共生の調査	英語	6名	福元広二 (地域文化学科) ケイツ・キップ (地域文化学科)
ベトナム フエプログラム	2013年3月3日 -11日	農村コミュニティと自然環境の調査・ フエ大学学生との交流	主に英語	14名	筒井一伸 (地域政策学科) 小玉芳敏 (地域環境学科) 仲野誠 (地域政策学科) 片垣亜弥子 (地域学部事務職員)
インドネシアプログラム	2013年3月19日 -26日	ムハマディヤ・ハムカ大学学生とのワークショップ・ エクスカージョン	英語と日本語	5名	仲野誠 (地域政策学科) 小泉元宏 (地域文化学科)

注) 担当教職員の所属はプログラム実施当時のものである。

## II 実施地域の概要

ベトナム中部に位置するトゥアティエンフエ省 (Tỉnh Thừa Thiên - Huế) は世界遺産の古都フエを有し、人口は 1,091,171 人 (2010 年)、面積は 5,033km<sup>2</sup> で省都フエ市 (Thành phố Huế) とフオンチャー町 (市社 / Thị xã Hương Trà) および 7 つの県 (Huyện) からなる。今年度のフィールド演習では自然環境に関する調査プログラムの調査テーマと担当教員が昨年度とは変更になり、海岸、特にラグーン周辺を調査することから、昨年度とは調査対象地を変更してフーヴァン県 (Huyện Phú Vang) フールオン行政村 (Xã Phú Lương) とすることとした。フエ市街地からおおよそ東に位置し、海外フィールド演習の拠点となるフエ科学大学から

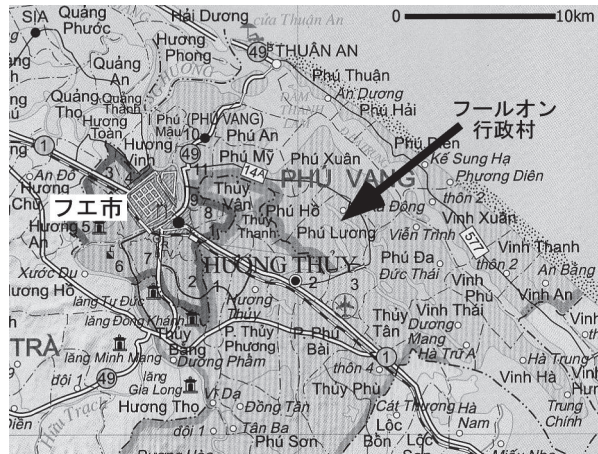


図1 フールオン行政村位置図

出典: "Tập bản đồ hành chính 63 tỉnh, thành phố Việt Nam 2011" を加工

は約 16km、自動車でおおよそ 30 分程度の距離にある (図 1)。ベトナムを縦断する主要幹線の国道 1 号線からは省道 3 号線を経由しておおよそ 10km 東方に行ったところであり、基本的には純農村の性格を有する。大学に進学する若者もではじめているが、卒業後に帰郷せず、都市部での就職を行う者が多い。そのため「高齢化」といった課題を村民が口にする地域でもある。人口は 6,753 人 (2012 年)、面積は 18.11km<sup>2</sup> で労働人口の 78.8% が農業の従事する。米の二期作が中心であり、加えて合作社 (Hợp tác xã) がキノコ類の換金作物の生産にも力を入れている。

自然環境グループはフールオン行政村内を中心にフィールド演習を行い、必要に応じて周辺地域のエクスカージョンを行った。一方、集落社会グループと集落資源グループはフールオン行政村の中のレーサーチュン村 (Thôn Lê Xá Trung) に絞ってフィールド演習を行うこととした。行政村はサー (xã) と称され憲法に規定された行政単位である (筒井ほか, 2011) のに対して、日本の集落に相当するものは村 (thôn) と呼ばれ、フールオン行政村には 10 の村がある。その一つのレーサーチ

チュン村は人口 254 人、世帯数 57 世帯（いずれも 2012 年）、面積 1.09ha である。図 2 のように北西から南東方向に向かって列村的な家屋配置を示している。村のほぼ中心に集会所（コミュニティハウス/Nhà Thôn）があり（写真 1）、また 2 軒のカフェや先に記したキノコ類を生産する合作社の工場もこの村に位置している。



写真 1 村の集会所

（2013 年 2 月 24 日撮影）



図 2 レーサーチュン村とその周辺

出典：ESRI ArcGIS Explore online より転載

(c) 2011 Microsoft Corporation and its data suppliers

### Ⅲ 海外フィールド演習のプログラム設計

#### 1. 全体プログラムの設計

昨年度と同様に海外フィールド演習の実施にあたっては筒井とフエ科学大学の受け入れ担当者との間で企画案の調整をはじめた（表 2）。昨年度の経験がある一方で、日本側の担当教員とベトナム側の受け入れ担当者が交代したこともあるので実施の 5 か月前から準備を開始した。当初の予定では調査プログラム担当は地形学を専門とする小玉と社会学を専門とする仲野が担うことになっていたため両者がともに調査を行いやすいという観点から演習実施地域の選定を、本学連合大学院農学研究科博士課程に留学中のフエ科学大学地理地質学部講師からのアドバイスを受けつつ行った。

参加学生の募集の開始は昨年度よりも約 1 か月早めて 11 月 14 日から冬季休業期間を挟んで 1 月 9 日までの間で行った。今年度は日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（ショートビジット）の採択を受けて、参加学生には 1 人当たり 8 万円の奨学金支援があった。その定員との関係で募集人員は昨年度より多い 10 名程度とした。そのため準備の過程で調査担当を担う教員だけでは現地での対応に支障をきたす可能性があるため、会計及び庶務を担当する事務職員の帯同の可能性についても同時並行で検討を進めた。参加学生の仮申し込みは全 4 学科から 19 名であった。説明会を 1 月 8 日に開催し、プログラム内容への関心度、これまでの大学主催の留学プログラムの参加状況などを把握する一方、海外フィールド演習の他のプログラムとの募集人数の調整を行い、募集人員よりを多い 14 名の参加者を確定した（表 3）。またこの時点で調査プログラム担当を小玉、仲野の 2 教員で担うには参加学生が多すぎるとの判断から、全体調整担当の筒井も別途調査プログラムを担当することとした。

表2 事前・事後スケジュール

日付	内容
2012年10月	フエ科学大学との打ち合わせを開始 (ベトナム側担当: レディントゥアン講師) 引率教員の決定
2012年11月14日	参加学生の募集開始
2012年12月6日	連合大学院農学研究科に留学中のフエ科学大学ドティ ヴィエット フォン (Đỗ Thị Việt Hương) 講師とフィールド 演習実施地域に関する打ち合わせを実施
2012年12月14日	フィールド演習実施地域をトゥアティエンフエ省フーヴァン県 フルオン行政村レーサーチュン村とすることを確定
2012年12月19日	事務職員の帯同を検討開始 (現地での演習中の庶務・会 計担当)
2013年1月7日	航空券の手配開始
2013年1月8日	海外フィールド演習 (ベトナム・フエ) 説明会開催
2013年1月9日	参加学生の仮申し込み締め切り (申し込み19名) (仮申し込み学生との面談等の実施)
2013年1月11日	参加学生の正式申し込み締め切り (正式申し込み14名 = 参加者確定) ・所属グループの確定
2013年1月15日	帯同する事務職員の決定
2013年1月-2月	宿泊場所・移動手段の手配・確定 (※パスポート未取得 学生は申請)
2013年1月21日	海外渡航前危機管理セミナー (講師: 竹田洋志 国際交 流センター副センター長/1月23日・2月14日にも開催)
2013年1月23日	参加申込書提出
2013年1月29日	航空券の手配完了 フエ科学大学より関係各機関に対して調査許可申請
2013年2月20日	事前課題提出
2013年2月21日	本プログラムに係る緊急連絡体制の確立
2013年2月21日	ベトナムでの最終打ち合わせの実施 (筒井とフエ科学大学お よびレーサーチュン村)
2013年3月1日	事前勉強会
2013年3月3日	出発
2013年3月11日	帰国
2013年3月19日	JASSO向け学生レポート提出期限
2013年3月25日	ベトナムへの学生フィードバック提出期限

表4 海外フィールド演習スケジュール

日付	行程
2013年3月3日	関西国際空港発ロビー集08:00集合 ベトナム航空VN321 関西10:30⇒ホーチミンシティ13:45 ベトナム航空VN1374 ホーチミンシティ16:55⇒フエ18:15 宿泊: Nguyen Hue Hotel
2013年3月4日	午前: フエ科学大学にてレクチャー 午後: フィールドエクスカーション (マイクロバス借り上げ) ウェルカムパーティー 宿泊: Nguyen Hue Hotel
2013年3月5日	全日: フィールド演習 (移動: ワゴン車借り上げ) 宿泊: Nguyen Hue Hotel
2013年3月6日	全日: フィールド演習 (移動: ワゴン車借り上げ) 宿泊: Nguyen Hue Hotel
2013年3月7日	全日: フィールド演習 (移動: ワゴン車借り上げ) 夕方: レーサーチュン村の人たちと交流会 宿泊: Nguyen Hue Hotel
2013年3月8日	午前: 演習結果のとりまとめ 午後: 報告会 宿泊: Nguyen Hue Hotel
2013年3月9日	全日: フエ市内エクスカーション (マイクロバス借り上げ) 夕方: お別れパーティー 宿泊: Nguyen Hue Hotel
2013年3月10日	全日: ホイアンほかエクスカーション (マイクロバス借り上げ) ベトナム航空VN1327 ダナン21:10⇒ホーチミンシティ22:20 ベトナム航空VN320 ホーチミンシティ00:05⇒関西07:00+1 宿泊: 機内泊
2012年3月11日	関西国際空港到着ロビー07:30解散

表3 参加学生の一覧

	所属	性別	学年	調査 グループ
1	地域環境学科	女	2	自然環境
2	地域環境学科	女	3	自然環境
3	地域政策学科	男	3	集落資源
4	地域政策学科	女	3	集落資源
5	地域政策学科	女	2	集落資源
6	地域政策学科	女	2	集落資源
7	地域政策学科	女	2	集落資源
8	地域政策学科	女	2	集落資源
9	地域教育学科	男	3	集落社会
10	地域文化学科	女	3	集落社会
11	地域政策学科	女	2	集落社会
12	地域政策学科	女	2	集落社会
13	地域政策学科	男	3	集落社会
14	地域政策学科	男	3	集落社会

プログラムは昨年とほぼ同じ日程で2013年3月3日から3月11日まで9日間の関西国際空港発着スケジュールを組んだ(表4)。今年度は参加者が多いため航空券手配はトップツアーにまとめて依頼した。本プログラムでは使用言語を英語とはしたものの、実際の地域調査において地域住民へのインタビューなどを英語で行うことは不可能である。そのため、フエ科学大学で英語が比較的堪能な学生、院生および若手教員の本プログラムへの参加を依頼し、日本人学生同様に調査グループに属して共同調査を行うと同時に英語とベトナム語の通訳も担うこととなった。参加者は、本プログラムの窓口となっている地理地質学部のみならず、仲野の専門にも比較的近い社会学部からも得られた(表5)。

また今年度の特徴として、レーサーチュン村の地域住民の方々との交流会を、村での調査が終了した3月7日に実施したことが挙げられる(写真1, 2, 3)。参加者は村長(集落長)をはじめとして15人の地域住民の方々の参加を得て、合計53名での交流会が開催できた。日本人学生

にとってみれば、調査に協力をしてもらっただけではなく地域の人々との親睦を深める意味があり、レーサーチュン村の地域の人々も、通常では関係を持つことが難しい日本人（外国人）の大学生との交流の場を設定することに関して好意的な受け止め方をしてくれた。地域の人々が住む生活の場での交流活動は、地域調査実習などで身に着けたコミュニケーションスキルを体感するいい機会を学生に提供したことになる。

表 5 フェ科学大学からの参加者の一覧

	所属	性別	身分	調査グループ
1	地理地質学部	男	講師	自然環境
2	地理地質学部	女	修士学生	自然環境
3	地理地質学部	男	学部生	自然環境
4	社会学部	女	講師	集落社会
5	社会学部	男	学部生	集落社会
6	地理地質学部	女	修士学生	集落社会
7	地理地質学部	男	学部生	集落社会
8	地理地質学部	男	講師	集落資源
9	地理地質学部	女	学部生	集落資源
10	地理地質学部	男	学部生	集落資源
11	地理地質学部	男	学部生	集落資源



写真2 地域住民の方々と  
交流会の様子 (1)

(2013年3月7日撮影)



写真3 地域住民の方々と  
交流会の様子 (2)

(2013年3月7日撮影)



写真4 地域住民の方々と  
交流会の様子 (3)

(2013年3月7日撮影)

## 2. フェ科学大学による準備とサポート

今回の受け入れ担当となっているフェ科学大学地理地質学部には約4か月前に鳥取大学地域学部から海外フィールド演習の計画書が提示され、それを受けて、フェ科学大学の教務担当などに計画書や協力支援などを提案した。具体的には、行政への学生フィールドワークの実施許可申請、講義室の占有使用の許可申請、大学の公用車使用に関する申請などである。これらの申請を受けて、フェ科学大学は上部組織であるフェ大学国際交流室への申請を行い、トゥアティエンフエ省の外務部、公安部、フーヴァン県人民委員会、フーヴァン県公安当局などへの申請も行った。

一方、地理地質学部では会議を重ね、調査計画書を基に鳥取大学の学生と一緒に調査を行うために、地理地質学部での協力体制の確立と担当教員および学生の選考を行った。またこの機会を使って、日本の大学の研究方法、調査方法を獲得することも目的とした。そのために、日本の文化、風習、習慣などを理解し、鳥取大学の学生の調査方法を学び、また英語でのコミュニケーション力の向上も目指す学生を選考した。フィールドワークを開始する2週間前に、地理地質学部での最後の会議を行い、フィールドワークを実施している間の対応に万全を期すよう確認をした。この会議でグループごとに名簿を作成し、参加学生の英語能力や現地調査の対応方法、グループの調査内容、スケジュール、送迎担当などの確認を行った。

調査を行うフルオン行政村との調整も1か月ほど前から断続的に行った。海外フィールド演習に参加する教員2人が担当し、1人は調査対象地域の概要をレクチャーするための講義準備、もう1人は調査地との調整を主に担当した。具体的な調整内容は、フェ大学の調査実施許可書をフルオ

ン行政村の人民委員会、公安当局およびレーサーチュン村の村長に提示し、海外フィールド演習に関連した情報収集、データの提供などの協力を依頼した。また担当教員自身も事前調査を実施し、対象地域の自然環境、経済、社会、文化などの最新情報を収集すると同時に、調査地域の景観確認やフエ科学大学から調査対象地域までのルート確認も実施した(図3)。さらに、外国人の学生が活動を行うことから地域の治安状況を綿密に確認し、参加者の食事場所やトイレなどの確保を行った。海外フィールド

演習を実施する約1週間前には調査目的、場所、日程をレーサーチュン村の役員と共有するために筒井とフエ科学大学の地理地質学部教員が調査対象地域を訪ねた最終打ち合わせを実施した。

海外フィールド演習の実施中も様々なサポートができるよう体制を整えた。まず、地域学部からの参加学生と教職員およびフエ科学大学の学生がベトナムや対象地域に関する全体的な事前知識を持つために地理地質学部の教員が英語でレクチャーを行った。主な内容は、ベトナムの紹介、トゥアティエンフエ省の地域概要、レーサーチュン村の概要などである。参考資料を冊子として作成して参加者全員に配布し、さらに学生に講義に関する疑問や調査地の質問などあれば、教員は可能な限り回答した。

レーサーチュン村でのフィールドワーク中、フエ科学大学の教員や学生は地域学部学生の地域住民への質問などを正確に英語からベトナム語に訳し、同時に、地域住民の回答も正確にベトナム語から英語に翻訳するように心がけた。また日本人学生が調査地の自然環境、伝統文化などをさらに理解してもらうために様々な要求にこたえた。この機会に、フエ科学大学の学生は日本の大学での研究方法、研究機材の充実さなどを知るとともに、日本人や日本文化などを理解し、また、英語コミュニケーション力を学ぶこともできたと考えられる。

### 3. 自然環境に関する調査プログラム

#### a. 自然環境調査グループの概要

自然環境調査グループでは、レーサーチュン村およびその周辺の地形を2日半にわたり調べた(表6)。出発前に地形図を読図すること、またGoogle Earthの衛星画像を注意深く観ることで、おおよその予想をたてて現地入りした。調査対象地域は集落が典型的な列村景観をなし、地形分類の有効性を知るのに適したフィールドであった。4日目にはトゥアティエンフエ省の北東に広がる浜堤列平野～海岸砂丘地を巡検した。Google Earthで広大な浜堤列平野が認められたためであった。

調査メンバーは地域学部3年生2名、フエ科学大学の講師1名、院生1名、学部2年生1名、そしてオーガナイザー小玉の計6名であった。車1台で移動可能であり、フィールドワークとして手頃な人数と言える。

地形景観および地形を構成する堆積物の観察を通じて、地形分類をおこなった。列村の地形的特徴を把握するために、携帯型光波測距儀(Laser Technology社製Tru Pulse360)を用いて断面測量を実施した。フエ科学大学のメンバーにとっては、はじめて扱う機器であったため、幾度か計測のや

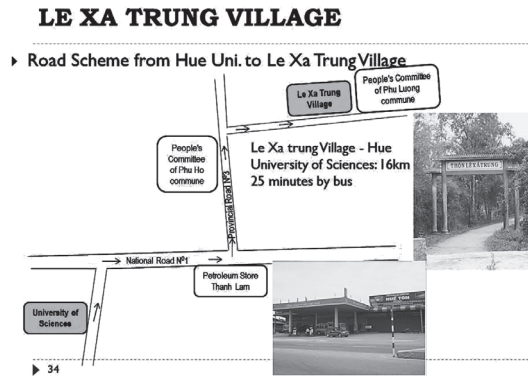


図3 フエ科学大学から調査地域までのルート確認

り直しが求められた。演習を通してこの機器の利便性が十分に伝わったようで、フエ科学大学ではこの機器の購入を検討していた。

### b. 調査結果

図4に地形分類および地形断面測量の結果を示す。調査対象地域は、5つの地形要素に分類された。i)現河川の河道、ii)旧河道跡、iii)自然堤防、iv)後背湿地、そしてv)浜堤列であった。

1) 現河道と旧河道跡：調査対象地域は、低平な沖積平野（三角州）を利用した広大な米作地域であり、河川は西から東に流れている。衛星画像に残された水田の地割パターンから、旧河道跡を推定し、現地で凹地形を確認した。

表6 自然環境グループの演習日程

日時	実習内容
3月4日	
9:00~10:30	ベトナムと調査地域の概要のレクチャー
10:30~12:00	自然環境グループの調査目的レクチャーと地形図の読図作業
13:30~17:00	レーザーチューン村の概査、村人との打ち合わせ
3月5日	
8:30	ホテルを出発して調査地へ移動
9:00~10:30	レーザーチューン村を往復し、地形断面の計測地点を絞る
10:30~11:30	地形断面測量の実施 (機器の取り扱いおよび断面測量方法の説明)
11:30~13:00	昼食・休憩
13:00~14:00	洪水時の様子に関して、村人への実体験聞き取り調査
14:00~15:00	横断測量結果の解析、聞き取り調査のまとめ
15:40~16:00	大学にてゼミ(自然堤防地形のまとめ)
3月6日	
8:30	ホテルを出発して調査地へ移動
9:00~9:30	フルオン行政役場で調査打ち合わせ
9:30~15:00	レーザーチューン村を出発して、時計回りにフルオン行政区を巡検 (白砂からなる浜堤列や後背湿地、他の自然堤防の観察および解説) レーザーチューン村から大学に戻る
15:30~16:00	2日半の調査内容のまとめと発表の構成・担当者の決定
3月7日	
8:00	ホテルを出発して、フエ北東の浜堤列平野や海岸砂丘をめざす
9:20~9:35	浜堤列平野の南端に到着 (自然堤防上に発達する集落と隣接する蛇行河川を観察・解説)
9:35~10:00	白砂からなる浜堤列群の地形・堆積物を観察・解説
10:00~10:20	堤間低地に広がる池の景観解説と浜堤列地形の非対称性観察および解説
11:00~11:30	砂浜海岸に到着し、景観観察および解説
11:30~11:50	海岸砂丘歩きと地形・堆積物の観察および解説
12:15~13:00	昼食・休憩
13:00~14:15	帰路、レーザーチューン村へ到着
14:15~15:00	巡検のまとめ
3月8日	
10:00~15:30	調査成果の発表準備(日本側2人とベトナム側2人で発表)
15:30~17:30	報告会

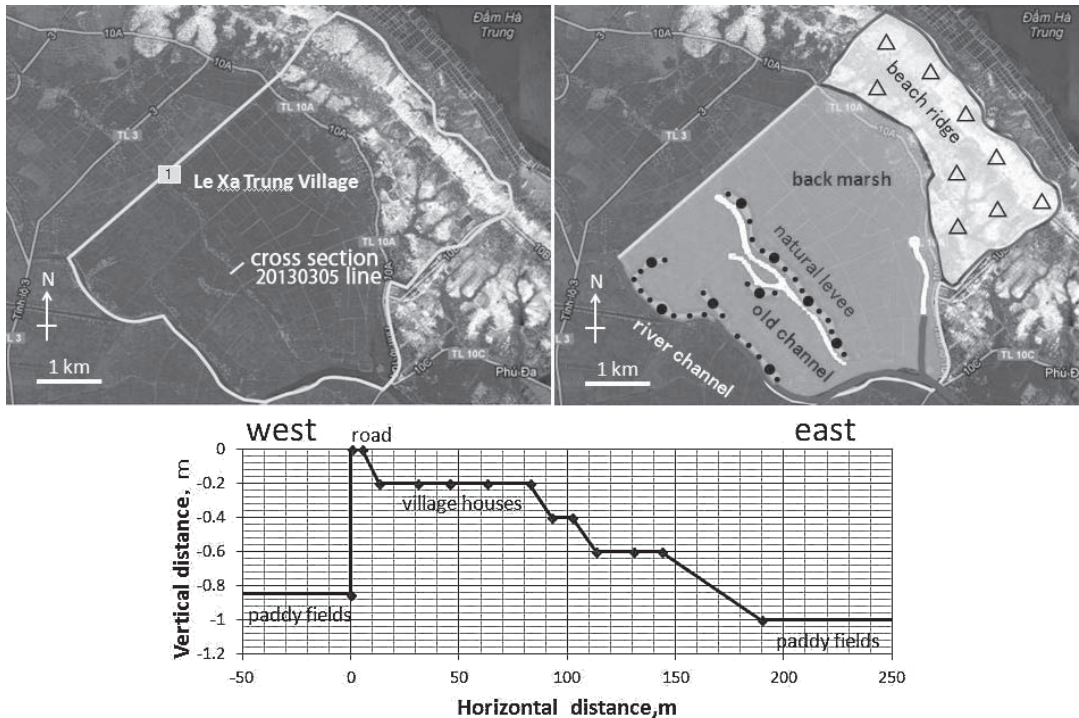


図4 レーザーチューン村の Google Earth 画像と地形分類結果および自然堤防の地形断面測量結果

2) 自然堤防と後背湿地：集落は水田から1mほどの比高をもった微高地に位置していた。現河道や旧河道に沿って、列状に微高地が存在した。微高地を横切る断面測量の結果は、明瞭な非対称性を示した。旧河道側で比高1m弱の急崖をもち、反対側の後背湿地（水田）に向けて200mほどにわたり徐々に高度を減じていた。これらのことより、自然堤防地形と判断された。

3) 浜堤列：調査地域の北東部は、白砂が分布する特異な地域であった。砂は細砂～中砂が主体で、なかに粗砂が少々混じっていた。雪のように真白な砂は、熱帯地域によく見られ、ほぼ100%石英の粒子からなる熱帯ポドゾル、または水成ポドゾルと呼ばれる養分に極めて乏しい土壌である。ハードパンの上に停滞する酸性の水によって化学風化が進行した結果、石英の砂だけが残ってできると考えられている（松本，2012，pp.166-167）。

この白砂地域の地形的特徴は、北東側（潟湖側）に急斜面、南西側（沖積平原側）に緩傾斜面を示すことである。現在地表面には風成作用を受けて小さな砂丘が形成されているものの、地形の骨組みを作ったのは越波作用であり、つまり浜堤列の地形と判断された。

4) 洪水の様子聞き取り調査：集落の端には洪水の水位を印したモニュメントが設けられており（写真5）、洪水常襲地域の減災教育を担っていた。レーサーチュン村で喫茶店を経営するグエンクアンディン（Nguyen Quang Dinh）氏に洪水時の様子をうかがった。1999年の洪水では24時間のうちに水位がみるみる上昇して、家の軒下まで達した。氏の家族は、天井を破り屋根の上に避難して、数日間を過ごした。1週間ほどしてようやく水がひいたようだ。

氏は屋根の上から洪水流を観察しており、大変貴重な証言を語った。「赤褐色の洪水流は、南西側を勢いよく流れ、家の周囲には、ゆっくりとした大きな渦がいくつも形成されていた」と。これは主流路の脇に形成された剥離渦と考えられる（図5）。自然堤防の形成プロセスとして大変重要な事実である。すなわち、洪水流に浮遊する細砂～シルトの岩屑は、剥離渦に捕足されて、そこに堆積すると考えられる。事実「1999年の洪水後には10cmほどの厚さで泥が家の周り、つまり自然堤防の頂部付近に堆積した」と伺った。自然堤防の形成プロセスは、従来横断面での水深変化に伴う減速のイメージしかなかった。本証言は、平面的な流れ場のイメージを新たに付け加えたといえる。筆者（小玉）はこの証言を一生忘れない。知的興奮を味わえた一瞬であった。



写真5 洪水水位  
モニュメント

※1999年 348.3cm, 2004年  
238.3cmの記録が刻まれている。1954年にも洪水被害に見舞われた。

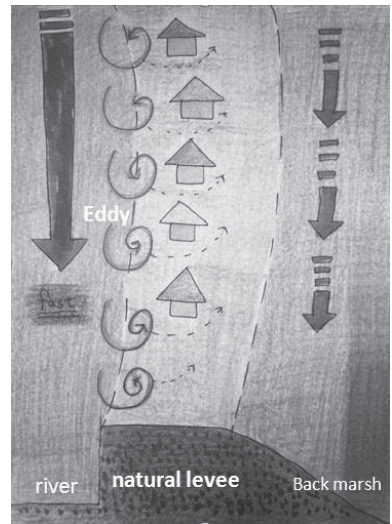


図5 聞き取り調査より学生が描いた自然堤防上に発生する洪水流剥離渦の模式鳥瞰図





図6 2013年3月7日の巡検コースとコース北西側に広がる浜堤列平野

および海岸砂丘の Google Earth 画像

5) 浜堤列平野の巡検：図6に示すように、フエの北西部では潟湖（ラグーン）の内陸側に白色帯と黒色水域が織りなす縞状地域（最大奥行き8km）が広がる。そして潟湖を埋め立てた沖積平野（幅3.6km）を挟んで北東側には淡黄白色の海岸砂丘（奥行き約2km～6km）が展開する。この巡検は、海岸砂丘以外、奇しくもレーザーチュン村でみた地形の復習となった。南から自然堤防と後背湿地、白砂からなる浜堤列群とそれらの堤間低地には地下水面があらわれた細長い池（図7）が続き、三角州状の沖積平野を挟んで、横列砂丘群（北東—南西方向に峰をもつ）へと景観が移り変わった。なかでも白砂で構成された浜堤列平野は、圧巻であった。海向き急斜面と、内陸向きの緩傾斜面の特徴を一望できた（図7）。いつか成り立ちを調べてみたい地域である。



図7 白砂からなる浜堤列平野の景観

(2013年03月07日撮影 16°37'25"N, 107°23'13"E)

陸向き緩斜面と海向き急斜面を破線で加筆した。

## 4. 集落社会に関する調査プログラム

### a. 集落社会調査グループの概要

集落調査グループはレーサーチュン村を調査地に定めた。その基本的な調査のスタイルは質的フィールド調査である。自分の足で現地を歩いて気になった素朴な疑問を入口にして自分なりの問いを立てることにその眼目をおく演習を行った。

今回のこのグループの目的は、ある問いを明らかにするためにデータを集め、自分なりの結論を導くという包括的な調査を実施することではなく、「正しい答えを出すために有効なデータや資料を集めることができるだけでなく、調査を進めていくなかで問題そのものの輪郭や構造を明らかにしていくことができる」（佐藤，2002，p.86）というフィールド調査の特徴のひとつを経験することであった。つまり「現地を歩いて、気になったことをもとにして意味のある問いを立ててみる」という、ひとつの調査のあくまでも最初の段階を経験することが今回の目的だった。今回の演習ではあえて調査を完結させず、調査の最初の部分（問いを立てること）に作業を集中させたということである。

その大きな理由はこの度の調査における時間的制約と言語的制約である。質的フィールド調査は当事者の生活世界を記述しながら、それにもとづいて意味のある問いを立てていく。そのためには当初の素朴な疑問にもとづくデータ収集をし、そのデータを分析しながら当事者のリアリティに近づき、問いを構成していくことになる。データとしての語りを分析することも多く、その作業は非効率的で多くの時間がかかるのが通常である。今回の演習では実質的な調査期間は2日半だった。以上の理由により、この演習では意味のある問いを立てることをその目的とした。

調査のイメージは図8のとおりである。この“Style A”は最初の問題設定にもとづいてデータを集め、分析し、結論を出すやり方である。今回の演習で経験したのは“Style B”の方法である。最初の素朴な問い（Initial Question）をデータ収集とそれに基づく議論を繰り返すことによって「意味のある問い（Meaningful Question）」に鍛え上げていった。今回の演習では、時間的制約が大きかったため、より「意味のある問い」に近づくこと、あるいは「問いを構造化」していくこと（問いを立てること）のみを訓練の目的とした（“Style B”の実線で囲われている部分）。そして問いに対する結論は導き出せなくても、仮説を提示することによって演習をひとまず形にすることにした。

このグループのメンバーは日本人学生6名、ベトナム人学生3名の合計9名であった。それを日本人2名とベトナム人1名の合計3名を1組として、3組に分けた。聞き取り調査を実施するためには各サブグループにベトナム人が所属することが必要であるため、必然的にこのような構成になった。

### b. 調査の手順

昨年度のベトナムプログラムの調査地は、フエのグビン山麓の路村だった。その時の調査法も今回と同様の質的フィールド調査であり、ベトナム人学生を通訳としてムラの住民へのインタビュー調査によってデータを収集した。その村では路村沿いに多くの雑貨店や食堂が立地しており、それ

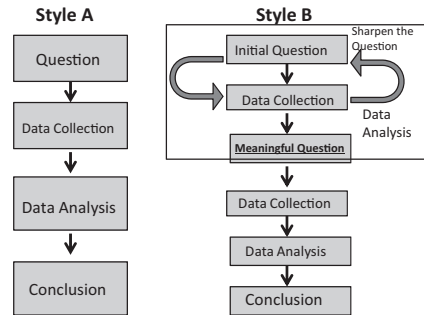


図8 調査のふたつのイメージ



**写真 6 調査対象の家族を調整  
 する村のリーダーとフエ科学大学  
 の教員たち**

(2013年3月5日撮影)

らを営む住民へのインタビューがメインの調査になった。そのため特にアポイントメントを取らずとも比較的人びとにアプローチしやすい環境であった。

それに対して、今年度の調査地には家族経営の小さなコーヒーショップを除いて店舗がほとんどなく、聞き取り調査の訪問先は一般の民家であった。そのため、アポイントメントを取らないで住民の自宅を訪問することは避けた。

調査の手順としては、まず住民の生業や家族構成などが記されたリストから学生たちは自分が話を聞きたい家族をいくつかピックアップした。そして事前に村のリーダーたちやフエ科学大学の教員の協力を得て、訪問先の家族にアポイントメントを取りながら聞き取り調査を進めた(写真 6)。この作業をすることにより、調査の自由性は少しばかり損なわれたものの、住民の協力を取り付けることができ順調に聞き取り調査を進めることができた。なお、聞き取り調査はベトナムの学生による通訳を介して実施された。

聞き取り調査によってデータを集めた後は、大学に戻ってそれらのデータをもとにディスカッションを行い、どのような「意味のある問い」を立てることができるのかとも考えた。このようにデータ収集とディスカッションを繰り返すことによって問いを立てることを試みた。

集落社会調査グループの演習日程は表7のとおりである。上述のとおり、毎回の聞き取り調査を始める前に聞き取りを希望する家族へのアポイントメントを取り付け、その後に当該家族のところに出向いた。まずは日々の暮らしに関する素朴な疑問を尋ねることからスタートし、気になることからをさらに深めていくようにしながら意味のある問いを立てることを試みた。

### c. それぞれのグループの問いと考察

3つのサブグループそれぞれの報告タイトル、問いおよび考察は表8のとおりである。

興味深いことは、この一覧からわかるように、これら学生のフィールド調査はベトナムの村を対象とした事例調査でありながら、結果的にはその調査事例が鏡となって日本人学生が生きている日本社会が逆照射されていることだろう。ベトナムの村の調査は、日本人学生にとって自分たちの社会を相対化し、再考する大変重要な機会になったようだ。

**表 7 集落社会グループの演習日程**

日時	実習内容
3月5日	
09:00~10:00	調査地のコミュニティセンターで調査の準備
10:00~11:30	調査対象の家族を訪問し、聞き取り調査開始
11:30~12:30	昼食
13:00~13:30	調査対象となる家族の調整
13:30~15:00	調査対象の家族を訪問し、最初の聞き取り調査
15:40~17:10	調査後大学に戻る 大学にてゼミ(調査データの整理および問いの構築)
3月6日	
8:30	ホテルを出発し調査地へ移動
9:00~9:40	調査の打合せ
9:40~11:00	調査対象の家族を訪問し、聞き取り調査
11:00~13:00	昼食・休憩
13:00~15:30	調査対象の家族を訪問し、聞き取り調査
16:00~17:00	調査後大学に戻る 大学にてゼミ(調査データの整理および問いの構築)
3月7日	
8:00	ホテルを出発し調査地へ移動
9:00~11:00	調査対象の家族を訪問し、聞き取り調査
11:00~12:30	昼食・休憩
13:00~15:00	調査対象の家族を訪問し、最後の聞き取り調査
3月8日	
10:00~15:30	調査のまとめ、報告会の準備
15:30~17:30	報告会

表 8 集落社会調査グループのサブグループの問いと考察

グループ名	報告タイトル	問い	考察
Aグループ	つながりの強さ—ある家族を事例に	村の人たちにとって家族とはどのようなものなのか。	レーサーチュン村では家族員同士はよく助け合っており、それが互いのつながりを強くしているのではないかと。これは日本の家族を再考するヒントになると考えられる。
Bグループ	ベトナム人はみんなのために祈る	ベトナム人はなぜ自分自身のためのみならず他者のためにも祈ることができるのか。	ベトナムでは生きている人たちのみならず死者のためにも祈ることが聞き取り調査でわかった。これがベトナムでの人びとのつながりを強化しているのではないかと。
Cグループ	私はベトナムがうらやましい—ベトナムと日本とはどちらが豊かなつながりがあるのか	ベトナム人はなぜ心の底から笑っているように見えるのか。ベトナム人はなぜ日本人を歓迎してくれるのだろうか。	ベトナム人はたがいに助け合うことに長けており、それが暮らしの豊かさや人間観のつながりを強化しているようだ。このような点で日本とは異なっている。

それぞれのサブグループの調査対象は異なる家族であり、それぞれのテーマも個別のものである。ただし、それらの問題関心としてすべてに共通するものが存在することは興味深い。それはいずれの調査も「つながり」に着目していることである。Aグループの学生たちは小さな雑貨店兼コーヒーショップを営んでいる家族の助け合いに着目した(写真7)。その家族内では家族員の特定の役割が決まっているというよりも様々な役割をそれぞれが負うことによって家計が支えられているのではないかとということに気づいた。そのような家族内での助け合いのあり方が、結局は日本における家族員間のつながりの脆弱化という課題に学生たちを向かわせた。

Bグループの学生たちはベトナムの家庭に多くの異なる形の祭壇(bàn thờ)がおかれていることに疑問をもち、それをきっかけにベトナム人の祈りについて聞き取り調査をすることになった(写真8)。その結果学生たちが気づいたのは、日本では自らの成功や幸福のためにのみ祈りがちな自分自身に比べ、ベトナム人は死者をも含むより多くの人たちの幸福のために祈っているのではないかとということだった。ここで学生たちは自分の生き方を反省させられることになったのである。

Cグループの学生たちは、ベトナムの村の住民たちが心の底からの笑顔でもって見ず知らずの自分たちを迎えてくれていることに驚いた。そこで、なぜ見ず知らずの自分たちをそれほどまでに快く受け入れてくれるのかを明らかにするための問いを立て、聞き取り調査を実施した(写真9)。その結果、ベトナム人の暮らしは物質的には日本よりもシンプルだが、つながりを大切にすることによって日本よりも「豊かな」暮らしをすることができているのではないかとという考察にたどり着いた。



写真7 調査中のAグループ

(2013年3月7日撮影)



写真8 調査中のBグループ

(2013年3月6日撮影)



写真9 調査中のCグループ

(2013年3月7日撮影)

これらフィールド調査は、実質的には2日半ほどの時間しか費やすことができず、しかも表8の考察も実証性において乱暴であり説得力が弱いものと言わざるを得ない。そしてこれらの考察はいずれも必ずしも整合性のあるデータに裏づけされたものではなく、仮説というよりは推論の域を出ない。しかしながら今回の演習の目的はあくまでも自分の足で現地を歩き、インタビューによってデータを収集し、データにもとづいて自分の最初の素朴な疑問を意味のある問いに構造化していく試みを経験することだった。この観点から考えると、学生たちのこのたびの演習は大変重要な訓練の機会であり、日本の演習では得がたい効果があったといえるだろう。

また、連日調査後にまとまった時間を確保して大学で実施したゼミも大変よい訓練の時間となった(写真10)。ゼミでは自分が得た断片的なデータを共有し、その事実からどんな意味のある問いが立てられるのか、それを明らかにするためにはどのような質問をすればよいのかなど、同じデータにもとづいてともに考える経験を直にもつことができた。その経験そのものが大変重要だった。

また、自分が得たデータを他者にきちんと伝えることは、報告者自身の思考の整理に役に立つこととなった。さらにはこのような基礎的訓練を英語でしなければならなかったことも、学生にとって貴重な経験になったことだろう。初めて訪れた地域で(しかも外国で)、学生たちは文字通り試行錯誤しながら自分なりの問いを立て、自分が見たリアリティを描き、他者に伝えようと格闘した。

## 5. 集落資源に関する調査プログラム

### a. 集落資源調査グループの概要

このグループではレーサーチュン村に住む住民の人々がどのように集落の資源や景観を認識しているのか、メンタルマップを用いて調査を行った。昨年度の海外フィールド演習ベトナムプログラムでは集落社会と自然環境の2つの調査グループであったが今年度は参加学生が多かったこともあり、全体調整を担当する筒井が別途に調査グループを結成して担当することとなった。そのため調査内容を他の2つのグループと重複しないようすることを心掛けた。日本語でのグループ名は集落資源調査グループであるのに対してベトナム側への説明(英語でのグループ名称)は Landscape Resource Research Group とした。地域資源(集落資源)という言葉は日本人学生には普段から授業で用いられていることからなじみがあるものの、ベトナム人学生にはなじみが全くないものであるため、地理学で汎用的に用いられる「景観(Landscape/cảnh quan)」という言葉を用いることで、ベトナム人学生に対する入口のハードルを下げる工夫を行った。

海外フィールド演習においては英語をコミュニケーションツールとして用いるが、ベトナムも英語圏ではなく、日本人学生と同様にベトナム人学生にとっても英語は「外国語」であるため、そのコミュニケーションには限界が生じる。そこでこのグループでは地図をいう「共通語」をサブコミュニケーションツールとして用いることで、英語でのコミュニケーションのみでは陥ることが予想される日本人学生とベトナム人学生との連携不足をできる限り低減することも試みた。ベトナム人学生の多くは地理地質学部の所属であり普段から“正しい”地図にはなじみがあり、むしろ日本人学生よりも地図リテラシーは高い。一方で本グループが技法として用いたメンタルマップとは認知地



写真10 収集したデータをもとにゼミで議論している様子

(2013年3月6日撮影)

図とも称されるもので、人々が周囲の環境をいかに認知しているかを地図化するものである。このメンタルマップについては日本人学生もベトナム人学生も必ずしもなじみがあるものではないため、田邊(2010)と日本地誌研究所編(1989)の「メンタルマップ」の項および Gregory, D. *et al.*, eds. (2009) の“mental maps/cognitive maps”を要約する事前課題を集落資源調査グループとして6名の日本人学生に2月2日に課した。提出は2月20日とし、3月1日にはグループ事前勉強会を実施した。あわせてベトナム側担当教員を介して英語でのメンタルマップの説明である Gregory, D. *et al.*, eds. (2009) の“mental maps/cognitive maps”の項をベトナム側参加学生にも事前に読ませて理解するよう促した。日本側にもベトナム側にも2年生の学部学生を含むため、難しい概念の理解ではなく、メンタルマップは何を目指して書いてもらうのかなど調査時に必要となる基本的な理解を促進することを目的とした。

調査シートに関しては、メンタルマップに係る基本的な設問とフェイスシートの項目は事前に担当教員が作成したものを使用した。本グループの目的はレーサーチュン村に住む住民の人々がどのように集落の資源や景観を認識しているのかを調査することであるが、比較対象がないと学生がその特徴を見出すことができない。そこでメンタルマップ調査を行う前に集落を歩いて、景観などで気付いたところ、特徴的なところを見つけ出して白地図に書き込んでいき、学生なりの集落地図をつくることとした。そしてその中から住民への調査シートにおいて尋ねるべき項目を学生の視点でつくり質問をすることとした。学生が作った項目についてはあえて“失敗”も経験させる意図から、事前には指導教員はあまり修正などのアドバイスはせず学生の意見に基づく質問とした。そして最終的には住民の方々のメンタルマップと自分たちの作った集落地図の違いを検討した。

表9 集落資源調査グループの演習日程

日時	実習内容
3月5日	
08:00-08:30	・ホテルを出発、レーサーチュン村へ移動
08:30-09:00	・集会所で日本とベトナムの学生とのミーティング
09:00-11:30	・担当教員、日本とベトナムの学生で村内エクスカージョンと学生視点の集落地図の作成
11:30-13:30	・集会所で昼食、カフェで休憩
13:30-15:00	・日本とベトナムの学生のみでの村内エクスカージョンと学生視点の集落地図の作成
15:00-15:30	・フエ科学大学へ移動
15:30-18:00	・アンケート調査票の作成(フエ大学)
3月6日	
08:00-08:30	・ホテルを出発、レーサーチュン村へ移動
08:30-09:30	・集会所で日本とベトナムの学生とのミーティング
09:30-11:00	・集会所でメンタルマップ(アンケート)調査の実施(住民3名を対象)
11:30-13:30	・集会所で昼食
13:30-15:00	・集会所でメンタルマップ(アンケート)調査の実施(住民3名を対象)
15:00-15:30	・フエ科学大学へ移動
15:30-18:00	・調査結果の取りまとめ(フエ大学)
3月7日	
08:00-08:30	・ホテルを出発、レーサーチュン村へ移動
08:30-11:30	・メンタルマップと学生視点の地図との差異の確認のための踏査
11:30-13:30	・食堂で昼食
11:30-13:30	・フーホー行政村(xã Phú Hộ)の食堂で昼食
13:30-15:00	・メンタルマップと学生視点の地図との差異の確認のための踏査
15:00-16:00	・合作社のキノコ工場の見学
16:00-18:30	・レーサーチュン村の人々との交流会
18:30-19:00	・ホテルへ移動
3月8日	
08:00-15:30	・調査結果の報告会プレゼンテーションの準備
15:30-18:00	・調査結果の報告会

## b. 調査プロセスと成果のとりまとめ

実際の調査は表9のようなプロセスと日程で実施した。まず3月4日(月)午後の全体エクスカージョンに引き続き、5日(火)の午前中は担当教員と学生とのエクスカージョンを実施し、さらに午後に学生だけのエクスカージョンを実施した。目的は学生視点での集落資源の地図化である。日本人学生はもちろんのこと本グループに参加したベトナム人学生もレーサーチュン村に来るのは初めてであり農村景観への物珍しさは日本人学生と同様にあったようである。事前に配布した地籍

図 (Bản đồ địa chính) にランドマークや気になった景観などをプロットしていき、学生視点での集落地図を作製した (写真 11)。その上で、それに関連する疑問などをアンケートにおける設問として作成した。

6日(水)はメンタルマップを含むアンケートを実施した。当日は村で結婚式が開かれており村民全員が多忙な中で午前中3名、午後3名の合計6名の方に協力をいただいた。アンケートへの協力時間はおおよそ1時間で3つのサブグループに学生が分かれてそれぞれが対応した。アンケートは村の集会所で実施した (写真 12)。7日(木)は地域住民の方のメンタルマップに見られた景観や資源などの現地確認及び学生視点での地図との差異の確認などを行うため村内の踏査を実施した。午前中は集会所を起点に南東側に向けて踏査を行った。午後は集会所を起点に北西側を踏査し、特に途中で訪問したすげ笠 (ノンラー-nón lá) をつくる家庭 (写真 13) には日本の学生もベトナムの学生も関心を持ったようである。

8日はフエ科学大学において学生が作成した集落地図と住民の方のメンタルマップとを比較してその共通点や差異を検討した上で、報告会においてプレゼンテーションを実施した (写真 14)。

まず学生が作成した集落地図よりも、住民の方のメンタルマップの方が記入しているランドマークの数が少なかった。住民のメンタルマップと学生が作成した集落地図を見比べた結果、集会所やゲートなどは双方とも描いていたが、学生がランドマークだと考えた電波塔やショップなどは描かれていなかった。集会所と村の入り口のゲートは学生の地図にも住民のメンタルマップにも登場し、シンボルかつランドマークとなっていることが分かった。一方で村境を本来の橋からではなくゲートから描く住民がほとんどであり、実際の村境(橋=川)ではなく、認識の上ではゲートが境界となっていることが分かった。ほぼ全員の地図には集会所が描かれており、重要な施設であることが窺える。

地域の方々に描いていただいたメンタルマップの中にも、大きな差がいくつか見られた。自分の家の周りのみを詳細に描いている地図や、村の全体を詳細に描いているものまで様々なものが並んだ。村の全体を最も詳細に描かれたのは、調査を行った村の村長であった。村長だから全体的な地図を描くことができたという断定は出来ないが、役職柄、普段から村全体を把握されているからこそ、広範的な地図を描くことができたのではないかという推測を行った (図 9)。



写真 11 集落地図作成のための調査の様子

(2013年3月5日撮影)



写真 12 メンタルマップを含むアンケート調査の様子

(2013年3月6日撮影)



写真 13 すげ笠をつくる家庭での見学の様子

(2013年3月7日撮影)



写真 14 フエ科学大学での報告会の様子

(2013年3月8日撮影)

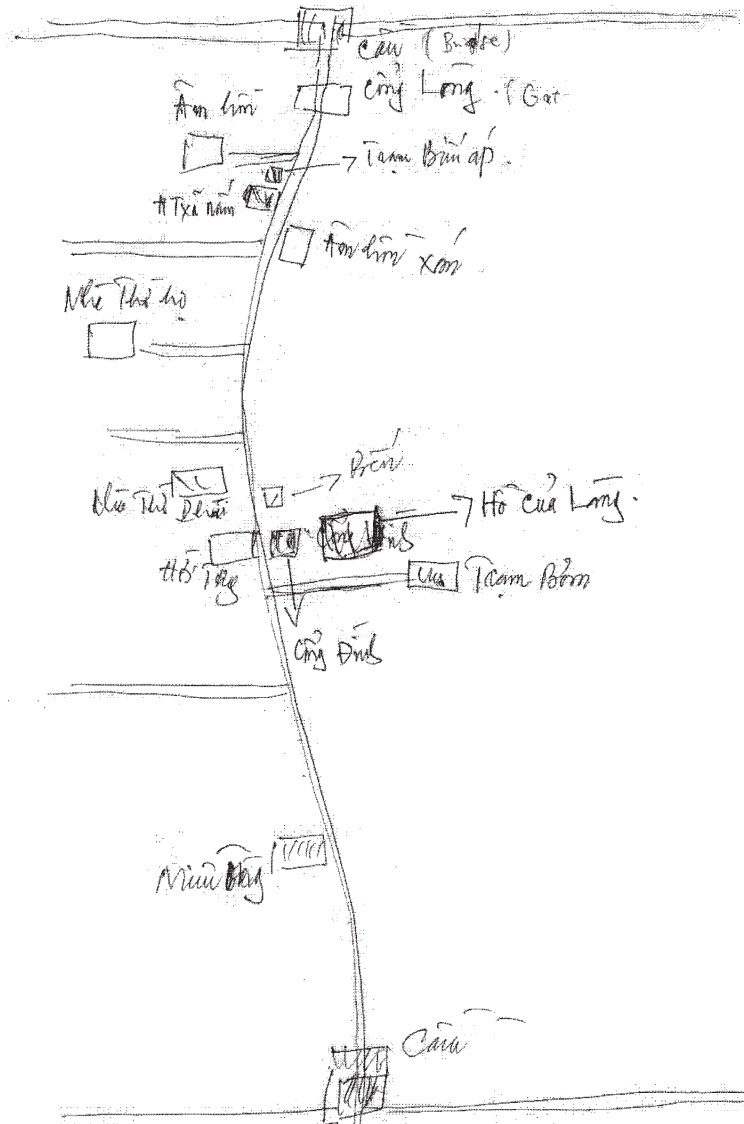


図9 村長のメンタルマップ

## 6. 事務職員の帯同

今回のパイロットプログラムにおいて、庶務的・事務的な事柄とプログラム実施のサポートが筆者（片垣）の主な役割であった。事務職員が帯同すること自体が初めての試みだったため、楽しみよりは不安のほうが強く、プログラムへの関わり方に戸惑った。何をどうすればよいのか全く分からず、実際にどのようなことが必要なのかイメージもわからなかった。加えて、筆者自身、ベトナムへの渡航が初めてであることが余計に不安感を増し、プレッシャーになった。この節では筆者が事務職員として実際に行ったことを整理して記述し、その意義や課題を述べる。



## a. 出発前の作業

出発前に行う事前手続きとして、まずは、ベトナムの調査地への入村及び同村での滞在に伴う役所及び警察への事前の届出が必要であった。そもそもそのような手続きが必要であること、そしてそれがこのプログラムにおいてどれほど重要なことなのかについても筆者は無知であった。それらの手続きは、全てこのプログラムのコーディネーターである筒井が行ったが、帯同職員としては本当にゼロからのスタートであった。その後、学生の参加申込書・旅券等必要書類の取りまとめ、参加者名簿の作成、危機管理セミナーへの参加案内、チケット手配、緊急連絡網の作成など、ひとつひとつの業務をこなしていった。参加学生数が14名と多数であり、学生の中には提出物の提出期限が守れない、連絡が取れないという、緊張感・危機感が感じられない学生もおり、直前まで本当に落ち着かなかった。

自分自身の語学力も含めて、プレッシャーと一抹の不安を抱えたままの出発となってしまった。しかし、自分のできることを精一杯しよう、事故・病気等なく、元気に皆が楽しく過ごせたらいいと気持ちを切り替え、いつしかプレッシャーも楽しみと期待に変わることとなった。

## b. 調査地での作業

このプログラムに携わってくださったフエ科学大学の先生方にお会いし、挨拶をした時、事務部の代表として来たのだから恥じないようにと、とても緊張し肩に力が入っていたのを今でもよく覚えている。しかし、温かい歓迎の言葉と優しい笑顔のお陰で、一瞬にしてその緊張も吹き飛んだ。フエ科学大学の先生方は、あたたかく見守ってくださり、力強いサポートと協力が心強かった。

現地では、庶務的な事務に加えて会計的な事務も任されていた。参加者から集金したお金の管理、食事の支払いなど、慣れない現地通貨ベトナムドンの取り扱いには本当に苦労した。謝金の支払い・レンタカー業者・ホテルへの支払いには言葉の壁もあり、英語を公用語としてコーディネーターのベトナム人教員を介して行ったのだが、ベトナム英語を聞き取るのが難しかった。それに対して英語で言いたいことを伝えることにも大変苦労した。事前に自分の頭の中で伝えなければならないことを整理し、即座に伝えなければならない。今回、自分でその経験をしてみて、その対応の難しさと柔軟に対応できる必要性を感じた。現場では、思いもよらない、想定していないイレギュラーなことが起こる。何も問題なくうまくいけばよいのだが、「まさか」の事態に直面したときに、焦らず、ミスなく処理できるように、1歩2歩先のことまで考えながら仕事をしないといけないということを痛感した。現場では、普段、事務方が一般的に処理しているやり方ではうまくいかないこともある。今後、同じように海外で教員たちが対応する際には、そのあたりも考慮して、できるだけ教員の負担が減るようにしなければいけない。このように自分の業務のやり方に対しても気づくことが多々あった。このようなことは、やはり身をもって経験しないと分からない。そして、そのような「気づき」こそが大切であり、それは、今回のような大学を離れたところでの業務でしか体験することができないと思う。

フエ科学大学の先生方を始め、まわりの方のサポートのお陰で、ひとつひとつ業務をこなすことができたことは自分自身の自信ともなった。たとえば調査地の村で、急遽、筆者は行政の方に挨拶をするという大役を務めることになったのだが、筆者に務まるのか本当に不安であった。緊張のあまり、どのように対応したのかははっきりとは覚えていないのだが、笑顔で無事に話を終えることができた。行政の方々と一緒に写真を撮り、最後には、私が女性であったことが良かった、と言ってもらうことができた。無事に責務を果たすことができたのだと安堵の気持ちでいっぱいになり、帯

同できて良かった,と心から思えた瞬間だった。本当に貴重な体験をさせていただくことができた。

### c. 学生のケア

学生たちにはできる限りみんなに目を配り、体調のこと、困っていることなど話を聞くことを心がけた。彼らの活動の記録を残すためにたくさんの写真を撮った。笑った顔、困った顔、一生懸命な顔、最初から最後までありのままの姿を記録に残すことができた。学生たちは最初は事務職員である筆者に対してよそよそしく、戸惑っている様子も見られたが、声をかけるといろいろな話をしてくれた。話を聞き、筆者なりの言葉で返すことしかできなかつたが、言葉の壁や、村での調査の行き詰まりで暗い顔をしていた学生が、翌日の調査で晴れ晴れとした顔をしている姿を見たときは本当に嬉しかった。

学生たちは1週間という限られた時間のうちの3日間だけ、自然環境調査・集落社会調査・集落資源調査の3グループに分かれて、テーマをもって調べる、聞き取りを行う、まとめるという難しい調査を実施した。それに加えて、ベトナム人学生とのコミュニケーションに苦戦しながらもお互いに支えあいながら進めている姿は胸を打つものがあった。学生には長い3日間だったかもしれないが、言葉も生活様式も異なる村で過ごした3日間は、何にも変えられない思い出深い時間となったことだろう。村人たちには歓迎していただき、あたたかく見守っていただき、本当に充実した時間となった。お別れ会では皆が笑顔で笑い合い、肩を組み、お互いを尊重し認め合い、言葉は違っても、同じアジア人として、最後は皆が「ひとつ」になれた気がしてとても嬉しかった。その瞬間を一緒に分かち合い、その場にいられたことを誇りに思う。

### d. 教員と事務職員のさらなるコラボレーションの必要性

このような経験ができたのは偶然ではなく、これもひとえに、これまでこのプログラムに携わった教員たちが積上げてきた結果である。長きに渡り、現地の大学とともに積み重ねてきた努力と信頼である。このようなプログラムには事務処理を行うための事務職員が必要だということ、相手方との交渉・調整がどれほど大変なことなのか、事務職員はもっと知る必要があると強く思った。これまで、教員たちが引率した学生たちに目を向けつつも、自ら事務処理も行っていたということに本当に脱帽した。どうして今まで、このような機会に積極的に事務職員が参加してこなかったのか、すごく不思議である。事務職員も積極的にこのようなプログラムには参加するべきだと改めて感じた。教員たちがどのような思いで海外のプログラムに取り組み、作り上げようとしているのかを知ること、そしてそれを支えることが事務職員には必要であると考えた。

「百聞は一見にしかず」、実際に自分の五感を使って体験することの重要性、そしてそこからの「気づき」が必ずあると思う。意味のないことはひとつとしてなく、海外フィールド演習に参加することによって事務職員も必ず日々の業務に役立つことがあると感じられるはずである。大学内では経験できない、外に出て分かることが必ずある。感じることは人それぞれであるが、このような機会を与えられているのにそこに参加しないのは本当にもったいないことである。筆者が、このプログラムで感じた緊張感・充実感・達成感をたくさんの人に経験していただきたいと強く願う。そしてもっともっと良いものにして、プログラムを長く続けていただきたいと思う。

### e. 筆者(片垣)自身の学び

筆者は初めて訪れたベトナムで、多様な生き方・考え方があることを知り、笑顔と自信に満ち溢

れ、幸福度の高いベトナム人を羨ましく感じた。もっともっと視野を広げたい、いろいろなことを知りたい、見たい、感じたいと強く思った。そのためには、まず自分の国のことを知らなければならない。そして語学力をアップさせなければならない。無知な自分に気づき、それを認めた上で、そのためには自分には何が必要であるか、何をすべきか、自己を見つめ直す良い機会となった。

今回のプログラムで得た経験、自信そしてまわりの方からいただいた言葉が、これからの私の糧となり励みになることは間違いない。そのような機会を与えてくださったことに心から感謝したい。

#### IV おわりに—課題の整理—

パイロットプログラムとして2年目を迎えた海外フィールド演習ベトナムプログラムであるが、当初の目的通りに、様々な課題を発見することができた。ここでは担当教員、参加学生、フエ科学大学、それぞれから挙げられた課題を概観した上で、課題の整理を行うことで本稿を閉じる。最初に担当教員から挙げられた演習を設計、実施する上の課題を概観する。

自然環境調査グループのフィールドワーク実施にあたり、社会主義国特有の手続きを正当にふまえることの重要性を痛感した。自然環境を調査対象にする場合、行政区では不十分な場合がほとんどである。ジェネラル・サーバイで観察を中心とする範囲を広く設定し、その内部に調査対象地域を位置づけることが望ましい。手続きの筋を通せば、地元の役人が調査に同行し、現地の詳細な情報が入手できるメリットも見逃せない。そのためにもフィールドワークの対象地域を早めに選定し、調査許可申請をベトナム側に依頼することが鍵となる。また、この種のフィールドワークを実りあるものとして持続させるためには、参加者全てにメリットが生じる仕組みを生み出すことが求められる。海外調査が初めての学生にとっては、フエ科学大学の学生との協働を通して、多くの気づきが生まれる。フエ科学大学の学生にとっても同様であろう。指導引率の教員にとっては、フィールドワークを通して新たな学びを体感できることが何よりのメリットである。自然から学ぶ姿が、フエ科学大学の若い研究者の刺激となれば幸いである。

集落社会調査グループの今年度の課題としては次の3つを挙げる。まず、集落社会調査グループ内のサブグループの編成についてである。今回は日本人とベトナム人学生数が2対1という比率だったため、必然的に日本人2人とベトナム人1人というサブグループを3つつくることになった。この編成は、自分自身の問いを構築することに眼目を置くこの訓練にはやや不向きであると思われた。予め問いが与えられている場合は必ずしもそうではないかもしれないが、日本人学生が同一グループ内に複数存在していると、周囲に遠慮して自分の問いを提起しない学生が現れる。大切なのは、自分の素朴な疑問をもとに、自分の知的好奇心を禁欲せずに意味のある問いを立てることだ。他の学生に気兼ねせず、のびのびと自分の問題関心と格闘することができる環境づくりが課題として残った。

二つ目の課題は、参加者の基礎的な英語力の担保という課題である。この演習は語学研修ではなく、カウンターパートの多くのベトナム人たちも英語が得意ではない。だから英語力は拙くても調査演習に参加できるということにこの海外フィールド演習プログラムの特質はある。その一方で、特に質的調査は聞き取り調査をその主なツールとするために、最低限の英語力は必要とされるのが現実である。今回は参加学生数が多かったためか、基礎的な英語力に欠ける学生もいた。学生が参加しやすい（参加のハードルが低い）海外での調査経験の入門コースとしての特長を保ちつつ、調査の水準をある程度一定のものに保つためには語学力の要求水準をどの程度にしたらよいか検討する必要がある。

三つ目の課題は、上述の語学力の問題と関連することであるが、質的フィールド調査の基礎的学習を事前に積むことの必要性だ。ベトナムの学生だけではなく、日本人学生もこの類の調査法に慣れているわけではない。むしろ多くの学生は「問いを立てる」という基礎的なことを十分に理解していない。日本では質的調査法に関する文献を事前に読み、そしてフエ科学大学では調査を開始する前に質的調査に関する簡単なレクチャーを実施してはいるが、3日間の演習がより実のあるものになるためにも、語学力のある程度の担保とともに、調査法への理解を事前により深めておくことが大切だろう。

参加学生からは、まずベトナムの情報を自分たちで調べて、身を守る方法や学習の準備をしっかり行うことが不足していた反省から、事前学習をきっちり行うことを課題として挙げられた。また、ある程度の語学力の必要性を感じた学生は多かったが、このことに学生自身が気づくことが海外フィールド演習を実施する目的の一つと担当教員は考えており、今回の経験を、学生たちが語学学習をすすんで行う上でのきっかけとしてもらえれば目的は達せられたといえる。さらに、学生ならではのコミュニケーションツールを提案する次のような声が挙げられた。

「今回私たちは、ある学生の思いつきから、ベトナムで有名な傘（ノンラー）にベトナムの学生やお世話になった方々にメッセージを書いてもらい、それをお土産として持ち帰りました。出会った人々の言葉がかかかれているものは、特別大切です。そこで、日本ならではのものに寄せ書きをしてベトナムの学生や先生方にプレゼントすることを提案します（日本から持っていくことも考えると、団扇などが良いのではないかと思います）。」

また今回は事務職員の帯同が行われたが、学生からは以下のような声が挙げられた。

「今回、女性事務職員が付き添いで来られたが、女性にしか話せない相談など、少し心強かった。この点は来年度にも引き継いでほしいと思った。」

海外フィールド演習の参加学生は、ベトナムプログラムに限らず女子学生の参加が多い傾向にある。一方で引率教員は男性教員が多い。そのため、演習中の海外での「生活」におけるサポート体制をいかに整えるかは課題である。女性の事務職員の帯同は、単に事務手続きを行うという意義だけでなく、慣れない学生への心理的なサポートも担えるということが今回の女性職員の帯同から得られた成果である。

ベトナム側の受け入れを担当したフエ科学大学地理地質学部からもいくつかの課題が示された。一つは準備段階から調査内容の相互理解が必要である。同じ学問分野でも国によってかなり事情は異なるため、調査開始後にその場でベトナム側が対応するのは難しいと思われる。全体調整の筒井が内容については事前に調整を図ってきたが、やはり専門外の分野になるとコーディネーターだけの調整では不足が生じる。そのため数か月前から日本側担当教員とベトナム側担当教員が相互に連絡を取り合う必要がある。また日本側は調査テーマを毎年変えるのではなく、ある程度固定化してベトナム側が慣れるように実施する必要がある。調査対象地域についても、ベトナムの調査許可の申請の煩雑さを考えると固定化したほうがよいと思われる。したがって、しばらくはレーザーチュン村を中心に据えて、必要に応じて周辺地域の調査を行うような演習の設計が求められよう。英語力についてもベトナム側から課題として指摘が挙げられているが、この問題は一朝一夕には解決はせず、また英語能力があるからといってコミュニケーションの問題は解決しない。このプログラムに必要な語学能力とコミュニケーション能力のベストミックスを考える必要がある。

実施体制について、日本側はある程度確立してきたと思われるが、ベトナム側はまだ試行錯誤が続いている。原因としては実施時期の問題と費用負担の問題である。ベトナム側の意向としては学

生の夏季休業との関係で6月から8月の間での実施を求めているが、日本側の準備の都合として3月に実施してきた。この時期はベトナムの学生の試験期間とも重なることから、学生募集に支障があるとのことである。実施時期の問題は2014年度に向けて引き続き協議を進める必要がある。また、ベトナム側の費用負担も相応に生じており、この部分についても継続的に解決に向けた検討を進める必要がある。

以上の点から、①実施体制の確立とベトナム側との綿密な調整、②日本とベトナム双方での事前学習の充実、③言葉を含めたコミュニケーションツールのベストミックスを検討、④継続した事務職員などの帯同による受講学生への「生活」上のケア、が今後の海外フィールド演習の継続に向けた課題として整理される。鳥取大学地域学部の学生にとっての教育効果だけではなく、カウンターパートの大学にとっての教育効果も生まれなければ海外フィールド演習は継続が難しい。国の事情は様々でありすぐに共通カリキュラム化などの方向に進むのは難しいが、両者がWin-Winの関係になるよう、協議を進めたうえでプログラム設計をすることが重要である。

## 謝辞

ベトナムにおける「海外フィールド演習」パイロットプログラムは2012年度採択の文部科学省「グローバル人材育成推進事業」の一環で試行をした。また学生の渡航費用については日本学生支援機構の留学生交流支援制度（ショートビジット）の採択を得た。実施にあたっては、フエ科学大学のグエン ヴァン タン (Nguyễn Văn Tân) 学長、ハー ヴァン ハイ (Hà Văn Hành) 副学長、グエン ヴァン ホップ (Nguyễn Văn Hợp) 科学技術国際交流室長、チャン フー トウイエン (Trần Hữu Tuyên) 地理地質学部長には様々な便宜をはかっていただいた。記して御礼申し上げます。

## 引用文献

- 佐藤郁哉 (2002) 『フィールドワークの技法—問いを鍛える, 仮説を育てる—』新曜社.
- 田川公太郎・永松 大 (2010) : 韓国江原大学校における「海外フィールド演習」のこころみ, 『地域学論集』7 : 323-336.
- 田邊奈瑠美 (2010) 『鳥取市賀露地区における景観変化と住民意識についての研究—メンタルマップによる分析—』, 2009年度鳥取大学地域学部地域政策学科卒業論文.
- 筒井一伸・ハー ヴァン ハイ・ブイ ティ トゥ・(2011) : ベトナム・トゥアティエンフエ省における工芸村の現状—ルーラルツーリズムの展開に向けて—, 『地域学論集』7 : 359-370.
- 筒井一伸・仲野 誠・永松 大・グエン クアン トゥアン・ブイ ティ トゥ・レ ディン トゥアン (2012) : ベトナムにおける「海外フィールド演習」の成果と課題—フエ市でのパイロットプログラムの実施を通して—, 『地域学論集』9 : 1-21.
- 日本地誌研究所 編 (1989) 『地理学辞典—改訂版』二宮書店.
- 松本栄次 (2012) 『写真は語る 南アメリカ・ブラジル・アマゾンの魅力』二宮書店.
- Gregory, D., Johnston, R.J., Pratt, G., Watts, M., and Whatmore, S. eds. 2009. *The dictionary of human geography*, 5th ed. Wiley-Blackwell Publishers.

(2013年6月7日受付, 2013年6月13日受理)